



言語獲得期にある子どもの象徴機能の発達とその支援

小山, 正

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-07-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙2956

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002956>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 小山 正
博士の専攻分野の名称 博士（学術）
学 位 記 番 号 博ろ第 115 号
学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 2 項該当
学位授与の 日 付 平成 19 年 7 月 25 日

【 学位論文題目 】

言語獲得期にある子どもの象徴機能の発達とその支援

審 査 委 員

主 査 教 授 小 椋 たみ子
教 授 松 嶋 隆二
教 授 西 光 義弘
准教授 長 坂 一 郎
大阪市立大学教授 麻 生 武

論文内容の要旨

氏名 小山 正

論文題目 言語獲得期にある子どもの象徴機能の発達とその支援

推薦教員 小椋たみ子教授

第1章においては、本研究の背景となる諸研究について概観し、本研究の目的を示した。第2章では、精神発達に遅れを示す子どもの言語獲得期の問題を探ることを目的に、児童相談所にことばの遅れを主訴として来所し、発達支援を行った25例を対象に前言語期と言語獲得期における言語獲得関連行動の発達状況について検討した。言語出現期の語彙数によって、A群（言語未獲得群）、B群（語彙1から3語未満）C群（語彙3語から10語）の3群に対象事例は分けられた。A群の言語未獲得群では、指さし理解やショウイング以外のやりとり行動、物の慣用的操作や身振りゲームは比較的良く発達していた。B群では、前言語期から言語獲得期にかけて統計的にも有意に象徴遊びが発達し、非伝達の指さしと電話の慣用的操作が発達する傾向がみられた。C群では、伝達の指さし、人形の慣用的操作、シエマを結合させた象徴遊び、語の模倣が有意に発達に有意に発達していた。またA群とB・C群との比較では、非伝達の指さし、カップとスプーンの慣用的操作、象徴遊び、語彙にある語の模倣などに有意差がみられた。これらの行動は、本研究で言語獲得関連行動として着目した諸行動のなかでも言語獲得と極めて関連があり、言語未獲得と言語獲得群との差は子どもの象徴化能力にあることが明らかとなった。

第3章では、前言語的コミュニケーションの側面に注目し、意図的伝達行為の高次化という観点から、その認知的前提を探るため、知的障害のある子ども27例を対象として、言語による伝達が発現するまでの主たる伝達行為の発達とその認知的基盤について検討した。認知発達の評価には、新版K式発達検査の認知・適応領域の項目を使用した。その結果、物へのリーチングや両手の協応性の発達、2つの対象に注意をむけることと物と物との原初的な関係づけ、第2次循環反応的対象活動の定着、インデックスの理解の発達が、注視、リーチング、発声を手段とした意図的伝達行為の発達の前提にあると考えられた。つぎに、クレーン、ショウイング、ギビング、指さしによる伝達行為出現の前提として、物の永続性の確立、目的-手段の関係理解、容器の中の物を取り出すこと、第3次循環反応的な対象活動、示指を中心とした手指操作などの発達が共通してみられたが、クレーン群においては、出す、掴む、保持する等の手操作の発達はみられたが、微細な手指操作の発達や注意の集中における弱さが示唆された。一方、指さしによる伝達行為の前提には、入れる物と入れられる物との関係理解の発達があると考えられた。また、言語による伝達

の認知的前提として、表象の形成、課題性を理解したうえで目的達成のための固執性、人差し指による対象の能動的な探索、物の慣用的操作、高さへの興味や空間理解の発達がみられた。

第4章では、1歳6か月健診でことばの遅れを指摘され、筆者が発達支援を行った事例における言語獲得過程から、言語獲得の基礎として何が大切であるか、特に子ども一人一物の三項関係の形成という観点から事例研究を行ない、言語獲得における三項関係形成の意義について明らかにした。本事例では、特に人と交わることを目的として大人との間に物を介在させる行為の出現が遅れた。そこでまず、物を介したやりとりを大人のほうから構成し、家庭では養育者との情緒的交流を大切にすることで、その関係性を育てることを目的とした。そしてそれらの発達とともに社会的喃語や模倣、そして、非伝達の指さしなどの行為が発現し象徴機能の発達がみられた。物を介在させた大人との相互交渉の過程で子どもにとっての「意味あるもの」が増えてくると、子どものほうから大人に働きかけるようになり、子ども一人一物の関係が成立し、指さしの機能も増え、有意味語も増加した。三項関係が形成される時期には、子どもの対物シエマも多様化し、それらのシエマを用いて物と物、物と人との関係づけが積極的に行われる。人との関係では、特定の人との基本的信頼感を基礎に、人との関係における子どもにとって「意味あるもの」を考え、子どもの対人的表象を形成していくことは、物と物、物と人との関係づけにつながり、前言語期の支援において、象徴機能の発達の基盤として必要であることが本事例への取り組みのなかで明らかとなった。

第1章において述べた個々の子どもとのやりとりのなかで基本的信頼の形成が模索され、しだいに形成されていく基本的信頼感を基に、安全基地となる特定の人との関係性が開け、対人・情緒的なレベルを基盤にしたこの大人とはこのようにする、遊ぶ、自分がこのようにすれば、この人はこのように応じてくれるといった子どもにとっての「意味あるもの」が形成され、それは、第2章の言語獲得期の諸発達を明らかにする中で、その弱さが明らかになった喃語発声（社会的喃語）や音声模倣といった言語獲得基礎としての音声的発達につながることを示された。本事例の発達経過から、象徴機能や言語獲得の基盤として子ども一人物との関係と人との関係を統合していくことの重要性が臨床的にも確認された。

第5章では、象徴遊び、言語が未出現である精神遅滞児11例を対象に、子どもが興味を持ち、象徴遊びが展開できる場を2週に1度の個別指導において設定した。平均8.5か月の指導の結果、全例に要求行動、発声行動、共同注意の発達がみられ、9例に1語発話が発現し、そのうち5例に1語発話増大がみられた。

象徴遊びの発達に関しては、特に他者認識の発達という新たな観点からとらえることが必要と考え、日常生活における子どもの人形を用いた象徴遊びに注目し、ひとりの子どもの縦断的観察を行った。また、これらの日常生活における人形を用いた象徴遊びにみられる他者認識の発達と言語獲得との関連性について、特に1語発話期後半にみられるボキヤ

ブラリー・スパートに注目して第6章において検討した。その結果、ボキャブラリー・スパートは日常生活における人形を用いた象徴遊びで他者の行為のふりがみられた後に起こり、ボキャブラリー・スパートが生じた後、象徴遊びにおいては現実経験の再現遊びがみられた。本研究の結果から、1語発話期における日常生活経験の広がり、子どもの家庭での人形を用いた象徴遊びや語彙の増加に関連していること、ボキャブラリー・スパートには、人形を用いた象徴遊びにおいて他者の行為のふりが可能になるといった他者認識の発達が関わっていることが明らかとなった。

このように筆者は、言語獲得期にある子どもの他者認識の発達をみるため、子どもの人形を用いた象徴遊びに注目してきた。第7章では、自閉症の子どもの対象として、他者認識の発達とともに自閉性障害のある子どもの人形を用いた遊びに変化がみられてくることを明らかにした。この研究では、療育者からの象徴的働きかけに対する受け止め具合についても明らかにした。その結果をみると、子どもの身体を物にみたてる（たとえば、子どもの身体を飛行機にみたてて飛ばすふりをする）情動・身体に関しては、1例を除いて全例において成立している。情動・身体的かかわりがプレイフルになるにつれて、事物を用いた働きかけに対する注目も増える。この研究では、小さな飛行機やヘリコプターを持ち挙げて旋回して飛んでいる様子を示すことを行っている。このような事物を用いた療育者の働きかけの受け止めは成立しているが、身体・情動的働きかけが受け止めることができない子どももいた。

療育者の人形を用いた象徴的働きかけについて、それが成立している事例をみると、子どもの身体を媒体にした働きかけや事物を媒体にした働きかけが共有できるというプロセスを経て、他者の人形を用いた象徴的働きかけが受け止められるようになっていた。また、自発的な人形遊びで、遊びのテーマを覚えていることや人形と人形との関連づけがみられている3例のうち2例に療育者の人形を用いた働きかけが共有できるようになっている。そのようなことから、出来事表象の形成や、他者の行為がより客観化・対象化されるといった他者認識の発達と人形を用いた象徴的働きかけの受け止めとの関連性が明らかになった。人形を用いた療育者の働きかけを受け止めることができるようになった事例2例では、2語発話以上の言語発達の段階に達しており、この2例では、人形を用いた働きかけを受け止めることができる時期に特に会話が成立し始め、言語発達に進展がみられていた。また、みたてや他者の行為のふり、子どもが日常生活において体験していることの再現、すなわち現実経験の再現がみられた事例は、言語発達が進んでいたが、これらの行為は自閉性障害のある子どもにおいては時間を要すると考えられた。

他者認識の発達をみながら自閉性障害のある子どもの発達支援を行っていくなかで、彼らの人形を用いた象徴遊びをみていると、療育者への基本的信頼感を基礎にし、療育者との共同活動としての遊びの変容ともに人形の扱いに変化がみられてくる。すなわち、人との関係のなかで、子どもにとって「意味あるもの」が増えてくると、人形を用いた象徴遊

びにも変化がみられてくるのである。特にそれは療育者の象徴的働きかけに対する子どもの受け止めかたの変化にみて取れるようになる。それは子どもの象徴化能力の発達と考えられる。

終章の全体的考察では、本研究において象徴機能の発達基盤と言語獲得関連行動や他者認識の発達を明らかになった点について述べた。そしてそれらの明らかになった点を基に、有効な支援について考えた。